

氏 名 (本 籍)	アンドレイ・ペケシュ (ユーゴスラビア)		
学 位 の 種 類	文 学 博 士		
学 位 記 番 号	博 甲 第 328 号		
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 61 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 五 条 第 1 項 該 当		
審 査 研 究 科	文 芸 ・ 言 語 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	テ ク ス ト と シ ン タ ク ス —— 日 本 語 に お け る コ ヒ ー ジ ョ ン の 実 験 的 研 究 ——		
主 査	筑波大学教授		寺 村 秀 夫
副 査	筑波大学教授	Ph. D.	草 薙 裕
副 査	筑波大学教授		芳 賀 純
副 査	筑波大学教授	文学博士	北 原 保 雄

## 論 文 の 要 旨

この研究は、日本語におけるシンタクスのテキスト的機能を究明することを目的に、パラフレーズ調査を用い、「シンタクスは文を構成する手段であると同時に、テキストのレベルでその背後にある意味関係を指示する手段でもある」という仮説をたて、被験者の伝達行為に見られる規則性を利用して、テキストの背後にある意味関係をより客観的に解明することを試みたものである。論文の構成は次の通りである (ワードプロセッサ印刷 175 頁——400 字詰約 470 枚相当)。

### 0 序

日本語における文の研究。その問題意識について

方法論

### 1 言語, 伝達, ディスコース, テキスト

言語のとらえかた

C O S E R I U の 言 語 像

伝達行為のモデルについての諸説

伝達行為のモデル

### 2 言語化のモデル

認知的内容と言語的意味の問題

C H A F E の 言 語 化 の モ デ ル

## 言語化のモデルとディスコースの問題

### 3 コヒージョン

コヒージョンのとらえ方

コヒージョンの静的なモデルと動的なモデル

話し手／聞き手側からみたコヒージョン

### 4 パラフレーズ調査の方法論

パラフレーズの方法論の輪郭

パラフレーズの同等性

テキストの最短文への分解

テキストにおける最短文の間の有縁性

### 5 テキストにおける最短文の間の有縁性

短文モードから複文モードへのパラフレーズ調査

データの分析

有縁性の言語化

### 6 連体修飾節のテキストにおける働き

最短文の間の関係

要約調査の手続き

要約調査によるデータの分析

平行・依存のテキストにおける指示

平行／依存と前景／背景との関係

### 7 テキストとシンタクス

本研究の位置付け

本研究における基本的概念

パラフレーズ調査の方法論

研究の結果

本研究の結果の性質および予測の可能性

テキストにおけるシンタクスの役割

これからの研究の課題

1ではいろいろの伝達行為のモデルを考察して、話し手あるいは書き手が伝えようとする意味(ディスコース)とそのコード化の所産(テキスト)という動的な側面をとり入れたモデルを研究の枠組みとして提案する。2ではそれに関連してChafeの言語化のモデルを考察している。3ではテキストを一つのまとまった全体として捉えるコヒージョンという概念とはいかなるものかを考察し、それがテキスト上での前提の要素と被前提の要素の間で、ある手段によって関係付けられたテキスト的世界のモデルにおいて成立する関係だと結論する。

4では、調査に用いた文の集合のある要素とパラフレーズされたテキスト上のある要素がテクス

ト的世界で同じ事項を指しているかどうかを追及する方法を考察している。5ではそのために、原文の集合上の二つの要素がそのパラフレーズで同じ文中に現れるかどうかというシンタクスの手段上の基準で「有縁性」という概念を規定する。そして、テキスト上のあらゆる要素の間の有縁性がマトリックスをなすことを確認する。これにクラスタ分析をかけることで、枝分れ図の形をとった有縁性のハイアラキーを得ている。このハイアラキーが南不二男の説く文における段階のハイアラキーと関連があることをデータで裏付ける。

6では、もとの文章の要素が要約されたテキストにどのような頻度で残されたか、また同時に残されたかどうかを基準として「平行」と「依存」という概念を導入する。前者は事柄の間の相互依存的あるいは並列的な関係であり、後者は一方的依存関係である。そして、連体修飾節は依存するほうを指示することで依存関係を表すこと、また、テキストにおいて背景的な情報を指示することを明らかにしている。

7では、シンタクスの手段の使用はテキストの処理を助け、テキストの能率性（理解しやすさ）をあげることができるが、最終的にテキストがどのように理解されるかは、テキストの能率性だけではなく、効率性（聞き手あるいは読み手に対する効果的な働きかけ）にもよるのでシンタクスの手段の究明だけでは不十分であるとしている。

## 審 査 の 要 旨

近年欧米を中心として文より大きい単位における言語学の研究がディスコース分析あるいはテキスト言語学という名のもとに盛んになってきている。また日本においても文章論の研究が行われてきた。そしてそのほとんどが研究者の言語に対する直観によって内省的に行われているのに対し、それをパラフレーズ調査という被験者を用いた実験を併用し実証的に分析する方法を提示した本研究はユニークである。しかも調査の結果のデータを内省的に分析するのではなく、ここでも統計学におけるクラスター分析という客観的手段を用いテキスト上の要素の間の関係（これを著者は有縁性という）を一目で理解できるように記述している。これも他に類を見ない点である。

また、本論文では言語による伝達行為、そこにおける言語化、テキスト上の要素間の関係などこの研究の基礎となる事柄が先行研究でどのように扱われているかを実に丹念に調査し、それを完全に近く消化しており、しかも本研究がそれらの研究の中でどういう位置をしめるか克明に記述している点、著者が自分の研究を十分に掌握していることを示している。

あえて問題点をあげれば、実際の調査の数をもっと多くしていたら、内省的な研究では絶対に出ない、被験者のグループ間の相違などが鮮明になり、もっと伝達行為の特徴が究明できたものと思われる。また著者は上記の独特な方法による伝達行為の研究のモデル化とその有効性の証明に力を集中したため、実験結果に現れた周辺現象にはあまり関心を示していないのが惜まれる。本研究における方法は客観的なものであり、上記のようにユニークであるが、逆に、たとえば特定のシン

タクスの手段がどのような役割を演じるかというようなことを解明するためにはそれが被験者によって使われるまで実験を続けなければならないといった欠点も指摘でき、今後そのようなことを踏まえた上で研究を継続し発展させていくことが望まれる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。